

光受寺通信

NO.181

Rowei 発行
発行元 光受寺



1月7日。『NHK スペシャル』「サグradaファミリア ガウディ 100年の謎」迫る 2023」という番組が放映されていた。

「サグradaファミリア」とは、ガウディが建設を手掛け、今では世界遺産になっているスペインのバルセロナにある教会の建物の事である。140年経ったその建設が続けられ、2026年の完成を目指しているのだという。

その未完成の教会を完成させるために40年以上、彫刻家として携わってこられた外尾悦郎さん。ガウディの残した設計図からサグradaファミリアに組み込まれる彫刻などの装飾を総監督しているという。

そしてガウディがこの教会を建てるにあたって、どんな思いで、どんな世界を表そうとしたのか、外尾さんは数少ない資料に小さな手掛かり求め、ガウディと対話をし続けてきたのだという。とりわけ世界一高い教会となる「イエスの塔」の空間の装飾は、「イエスそのものがある空間」としてどう表現したらよいか、大いに悩んだのだという。

そんな折、外尾さんの元に重要な情報もたらされ、ガウディが「色の研究」に没頭していたという事が分かったのだ。色が境目なく混じり合うグラデーションの実験を、天然の石の断面の色彩を利用して行っていたという事実であった。

それによって外尾さんは、「ガウディがサグradaファミリアで何を表現しようとしていたのか。40年探し続けてきて、やっとこれを見つけたよ」と、その喜びを語っていた。

その「いかに」を語っていたのだ。
「自然には境目がないですよね。いろんな色はあるけれど、境目はないんです。空の色も海の色も。色は無限にグラデーションがかかって変わっていく。ところが人間の作るものは境目がある。それをガウディは悲しく思ったんじゃないかなと思うんですよ」。

さらに外尾さんの想像は、ガウディの本当の願いへと導かれて行くのだ。そして、それが外尾さんの結論ともなったのだ。

「貧富の差や、社会の分断が広がり、苦しみが続く人間の世界。人間が作るその境目を、自然のグラデーションのように乗り越える。それが、ガウディが「イエスの塔」に託した願いではないか」と。

そして、外尾さんは「光あれ」という神の言葉によって、この世のすべてが生まれ始めたという意味を色のグラデーションで表現しようとしていたのだ。



私はこの番組を観て、外尾さんのこの教会建設に対する情熱は、偉大なガウディの願いを読み解くこと入るものであったが、「建築を通じて、人を幸せにしよう」という一点においてガウディの思いと響き合い、共になすべき使命感を成し遂げるためのものであったと思えてくる。

外尾さんのつくりあげる「イエスの塔」の無限のグラデーションの世界は、国を超え民族を超え、宗教を超えての願いでもあるはずだ、と思えたのだ。

親鸞聖人御誕生850年、立教開宗800年記念。

前進座特別公演の紹介。

花ごぶし

2024年3月4日(月) 14:00開演

親鸞聖人とその妻、恵信尼の

会場 岐阜市民会館

慈しむと絆の物語。

観劇料金 6,000円

申し込み

0422-49-2633

(前席指定席)

今月の掲示板

聞法とは
私が法を聞くこと
ではなく
私を法に聞くこと
である。 山田恵美子さん

聞法とは、読んで字のごとく法を聞くことですが、何のために法を聞くのかが問題なのです。ご自身の自分の思いや都合を根底に据えて法を聞くことではなく、法の前に自分の今の生き方を問うていくことなのです。法を聞くということとは、ある意味厳しいことかもしれませんが、迷いの人生から目を覚ますことにも大切なことなのです。

おしらせ

光受寺学習会…二月十七日(土)午後2時より

「歎異抄」第7条について 光受寺にて

お寺サロン…二月十五日(木) 午後一時半より

「長良川豪雨水害を振り返る」 光受寺にて



光受寺春の催し —観梅会—

2月下旬(日)~3月10日(日)
10時~14時

期間 2月25日(日)~3月3日(日)

本年も墨俣の春の行事として行われる「つひびな小町めづり」(主催 いき粹墨俣創成プロジェクト)による催し物の一部が光受寺を会場として行われますので、観梅と合わせてぜひお出かけください、お楽しみいただけたらと思います。

2月25日(日) 13時30分

墨俣さくら座「落語」

入場無料。定員は40名。

出演 笑福亭智丸

(上方落語協会に所属する落語家。笑福亭仁智門下)

大垣落語の会

3月2日(土) 13時30分

ブルースターズによる

バンド演奏

いき粹創成プロジェクト主催

お寺サロン 廣専寺にて



一月十八日
(木) 時半
当日は雨にもかかわらず、16名の門徒さんが参加してくださいました。
「正信偈」について学びます。

光受寺学習会

歎異抄 第6章を学びました。

「親鸞は弟子一人ももたず」と語られたことについて、その真意を学びました。(本文省略)

親鸞聖人の弟子と言われる人たちは実際には多くいたのですが、親鸞はその人たちを弟子であるという受け止めはされていなかったのです。「念仏往生」の信心は、ご自身でも阿弥陀如来のはたらきによって発起するものであつて、決して親鸞が授け与えたものではないと言言されたのです。

つまり、親鸞自身も如来のお弟子であるという受け止めをされていたことごとであり、共に浄土への道を歩む「御同明、御同行」という立場を明らかにされたのです。

ただ、「この親鸞は弟子一人ももたず」という言葉は、親鸞自身の自己反省の言葉であるとも言われています。

その根拠の「し」として、自然法爾(じねんほうじ)の章にある和讃「是非も知らず邪正もわからぬこの身なり、小慈、小悲もなければ、名利に人師をこのむなり」とあることから、指導者としての名利心がなかつたわけではなく、指導者意識に強くとらわれてくる自己の内省があつたからと、「親鸞は弟子一人ももたず」という世界に出入されたのではないかと言われています。